

Digest of Science of Labour

労働の科学

労研創立
100周年
1921→2021

2021

May

Vol. 76, No. 5



特集

産業博物館を訪ねて モノたちの語らいに耳をすまそう！

炭鉱の街で石炭の歴史に学ぶ／大牟田市石炭産業科学館
「食」情報の収集と発信を通じ新たな「食文化」の創造を目指す／味の素食の文化センター
活版文化の遺産を守り活字のぬくもりを今に伝える／アジア活版資料館
モノづくりにかけた情熱を次世代へ語り継ぐ／トヨタ産業技術記念館

巻頭言

働く者の希望の実現に向けて
さらなる一歩を

鬼木 誠

連載

ILOインド・南アジアこぼればなし②

川上 剛

新連載 チャレンジ!SDGs①

泉 貴嗣

労働の科学

2021
May
Vol. 76, No. 5

巻頭言

俯瞰（ふかん）

創立百年——これからの労研の役割とあり方⑤

働く者の希望の実現に向けてさらなる一步を

鬼木 誠 [全日本自治団体労働組合 書記長]

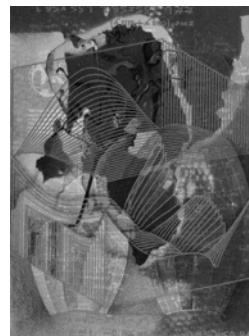
1

表紙作品：山本美智代

「宇宙ステーション」

版画・シルクスクリーン（49×35.5cm）

表紙デザイン：大西文子



産業博物館を訪ねて— モノたちの語らいに耳をすまそう！

炭鉱の街で石炭の歴史に学ぶ

[大牟田市石炭産業科学館] 坂井 義哉 4

「食」情報の収集と発信を通じ新たな「食文化」の創造を目指す

[公益財団法人味の素の文化センター] 草野 美保 10

活版文化の遺産を守り活字のぬくもりを今に伝える

アジア活版資料館 15

モノづくりにかけた情熱を次世代へ語り継ぐ

トヨタ産業技術記念館 20

Graphic

広がる参加型職場環境改善 5 [見る・活動](124)

仲尾 豊樹 口絵

Series

ILOインド・南アジア こぼればなし (2) ネパールの家内労働職場から	川上 剛	28
チャレンジ!SDGs (1) SDGsによる社会の変化を直視する	泉 貴嗣	34
「#教師のバトン」で伝わる (2) 教職員の過酷な勤務環境	藤川 伸治	38
地下水づくり 大原孫三郎と清水安三(3)	兼田 麗子	42
漂流者たち クミジョの肖像 (3) クミジョ研究はなぜ存在しないのか(2).....	本田 一成	46
凡夫の安全衛生記 (52) 「同じ立場の人たち」 業界活動を通して知る	福成 雄三	48

Column

Talk to Talk 改めるに	肝付 邦憲	50
演劇が描く「働く人々」 『蠟燭の灯，太陽の光』 炭鉱の街に生きる労働者の物語	編集部	54
BOOKS 『幸せな職場の経営学～「働きたくてたまらないチーム」の作り方～』 幸せの4つ因子の実践！	椎名 和仁	56
労働科学のページ		57
次号予定・編集雑記		64

働く者の希望の実現に向けてさらなる一歩を

鬼木 誠

労働科学研究所の創立100周年を心よりお祝いたします。

幾多の困難を乗り越え、100年の長きにわたって精力的な活動を展開することを可能としたのは、揺るぎない「創立の志」と衰えることのない「情熱」ではなかったかと思えます。

現場を起点に、働く者の安全・衛生・健康を科学するという研究所としての一貫した姿勢に基づく数多くの成果は、労働者の意欲と活力を生み、様々な産業の発展に寄与してきました。とりわけ、労働の現場において「人を中心に置く」とこの重要性が広く認識されることになったことの意義は、極めて大きいと考えています。

私たち、自治労の組合員の多くは、公務・公共サービスに従事しています。昨年来の新型コロナウイルス感染症の蔓延により、公共サービスの現場は極めて厳しい職場状況となりました。医療現場や保健所のひび迫した状況は報道等により広く知られることとなりましたが、それらの職場だけでなく、保育所や介護施設、清掃や調理の現場、そして役所の窓口など、多くの職場で1年以上、感染症と必死になつて向き合い、懸命に住民の命と健康、生活を守るための奮闘が続いています。しかし、限られた人員での業務運営には限界もあり、全国的な感染症の蔓延というかつてない事態の進行は、今日

の公共サービスの脆弱性を浮き彫りにしました。共有させていたいただきたいのは、今まで万全であった公共サービス、そしてそれを支える体制が、新型コロナウイルスにより浸食され毀損されたのではなく、この間の新自由主義的な政策の推進により、すでに公共サービスはギリギリの状態に追い込まれていたということです。その事実・実態が感染症の蔓延という事態の中で、浮き彫りにされ、明らかになったと捉えています。

ギリギリの状態にあった公共サービスをこれまで支えてきたのは、「職員の献身性」に他なりません。自治体をはじめ、多くの公共サービスの現場において、首長や使用者のリーダーシップに基づく危機管理対応は、有効に機能しませんでした。打ち出された感染症への対応策の多くは、増員による体制の拡充がなされないうまま、現行体制下における職員のさらなる奮闘に依拠したものでしかありませんでした。職員の献身性にすぎなければ成り立たない、職員に過度な精神的、肉体的な犠牲を強いることでしか「公共サービス」の提供ができない、それが、今日の現場実態であり、それは、健全な公共サービスの姿とは程遠いものと言わざるを得ません。最も問題なのは、首長や使用者に、公共サービスの提供が労働であるということの認識、そしてその労働の主体としての「人」への視点が欠落していることです。人はモノでも機械



おにきまこと
全日本自治団体労働組合 書記長
大原記念労働科学研究所 評議員

でもないという、極めて当たり前のことが公共サービスの現場では看過され続けている。真に感染症が明らかにしたのは、この事実だと思います。

公共サービスの現場だけでなく、このような労働の現場はまだ数多くあるのかもしれません。だからこそ、どのような時代になつても、労働科学研究所が貫かれてきた、「労働の現場において「人を中心に置く」とこの重要性」という課題認識は、現在進行する問題と向き合ううえで、極めて重要な指標となると考えています。

周年を寿ぐ目的の一つは、来し方を振り返り、立ち位置を確認し、次への目標を定めることにあると思います。

労働科学研究所の100年にわたる歴史の振り返りが、次の100年に向けての希望を明らかにし、すべての働く者の希望の実現に向けた新たな力強い一歩となりますことを心よりご祈念いたします。

